ハイディ（第八回）

――ヨハンナ・スピリ原作――

津田芳雄譯

先生がお見えになると、ロッテンマイアさんは、いつもの樣に眞直ぐに勉强部屋へは案内しないで、まづ食堂に引き留めて、ハイディ到着以來のさま〴〵な出來事の愚痴をたら〴〵と述べ立てた。しかも事の起りは、ロッテンマイアルさんが自分で始終クララに附ききつて世話をしなければならないことに少々うんざりして、勉强や遊びのお相手をする子供を雇ふことを旅行中のゼーゼマン氏にすゝめたのであつた。ゼーゼマン氏も大贊成で、たゞくれ〴〵もその子供をクララと同格に取扱ふやうにと注意して寄越したくらゐであるから、今更自分の一存でハイディを追ひ歸すわけに行かないのである。それでロッテンマイアさんは一生懸命にハイディのお行儀しらずや、「いろは」さへ習つてゐないことを云ひ立てて、先生から、こんな學力のちがふ二人の生徒を一時に教へることはとても出來ない、と云つていたゞきたいと、賴むのであつた。しかし先生は、愼しみ深い公平な人だつたので、ロッテンマイアさんをなだめて、まあまあその子にも、一方に缺點があれば、またほかに取り柄もあるであらうから、規則正しく教へて行けば、ぢきに追ひ付けるだらうと云つた。ロッテンマイアさんは、先生が味方になつてくれないのを見て取ると、「いろは」の手ほどきのお相伴などと眞平なので、先生を勉强部屋に案内してしまふと、自分は食堂にのこり、ドアをぴつたりと閉めて、いら〴〵しながら部屋中を歩きまわつた。ゼーゼマン樣の吩咐けとあれば仕方もないが、あんな田舍者のハイディを、お孃樣のクララと同等に取り扱ふなんて、忌々しい、さしづめ召使達に、ハイディのことをどう呼ばせたものだらうかと、思ひあぐねてゐた。すると、突然、勉强部屋の方

から、ガチャンと物凄いものゝくだける音がして、續いてけたたましくセバスチャンを呼び立てる聲が聞えて來た。ロッテンマイアさんは驚いて駈けつけて見ると、床の上には本や練習帳やインキ壺がひつくりかへり、その上にテーブル掛がかぶさつて、黑いインキがごろりと床の上を流れてゐる。ハイディの姿は見えない。

「まあ、このていたらくだわ！　きつとあの子の仕業でせう」

ロッテンマイアさんは身もだえして叫んだ。

先生は、困つて、呆然とこの有樣をながめてゐた。クララは、いつも退窟で飽き〳〵してゐるので、とにかく變つた出來事が珍らしくて、「どうなるかな」と、一人で面白がつてゐた。

「え！　ハイディがしたのよ」クララは說明した。「でも、ほんとに、はづみでやつたのよ。叱らないでね。おもてを澤山馬車が通つたの。そしたらハイディは、それを見に行かうと思つて、あわてゝ跳び上つたものだから、テーブル掛がひつかゝつて、何もかもひつくり返つてしまつたの。きつとハイディは、今までに馬車なんて見たことがなかつたんだわ」

「だから私の云はないことですか。ほんとうに、お稽古の間ぐらゐ、ぢつとして聞いてゐなければならないことも知らないなんて！そして、こんなさわぎを起しておいて、一體あの子はどこへ行つたのでせう。まさか逃げ出したのぢやないでせうね。且那樣にも申し譯がない」

ロッテンマイアさんは階段を駈け降りた。すると、開け放された門のところに、ハイディが突つ立つて、びつくりした樣な顏をして、しきりに往來をながめてゐた。

「なにしてゐるんです。そんなことをして、逃げ出さうとでも考へてゐるのでせう」

ロッテンマイアさんは叫んだ。

「あのね、樅の木の鳴る音が聞えたから、わたし飛び出して來たの。だけど、樅の木なんかどこにも見えないし、音だつて、もう聞えないわ」

ハイディはつまらなさうに云つた。馬車の走る音が、ちやうど樅の木が南風に枝を鳴らす音のやうに聞えたので、わく〳〵しながら飛び出して來たのだつた。

「樅の木ですつて！　こゝは森の中ぢやありませんよ、馬鹿〳〵しい。お二階へ上つて、あんた

がごんなわるさをしたか、見ていらつしやい」

ハイディはおとなしく蹤いて上つた。そして、自分のし出かした有樣を見て、びつくりしてしまつた。たゞもうむしようにまつかりで、こんなに何もかもひつくり返してしまつたことなど、夢にも知らなかつたのである。

「こんごだけは許してあげますがね、もう二度とするんぢやありませんよ」ロッテンマイアさんは床の上を指さして云つた。

「お稽古の間は、おとなしく坐つて聽いてゐるのです。もしそれが出來ない樣なら、椅子にしばりつけますよ。よござんすか」

「もうきつとしません」。

ハイディには、今やつと、お稽古の間はぢつと坐つてゐなければならないといふきまりがわかつたのである。

セバスチャンとティネッテが呼び立てられて後片附をし、先生はこんな有樣ではもう授業も續けられないので、すぐお歸りになつた。お蔭でこの日は誰も欠伸をしないですんだ。

クララは午後少しお晝寢をしなければならないので、その間はハイディはすきなことをしてゐてよいと、ロッテンマイアさんが云つた。ハイディは今こそ「あのこと」をしようと思ひ、しかしそれは手傳つてもらはねば出來ないので、食堂の前の廊下でセバスチャンの來るのを待つてゐた。すると間もなく、食堂の戸棚に仕舞ふ銀の茶道具をお盆に載せて、セバスチャンが臺所から上つて來た。ハイディはつか〳〵とそはへ行つて、ロッテンマイアさんから教へられた通りの召使への言葉づかひで話しかけた。

セバスチャンはびつくりして、一寸むつとしたやうに云つた。

「何の御用ですか、お孃さん」

「お前にちよつと頼みたいことがあるのだけれど。——でも、それね、今朝みたいな、あんないけないことぢやないのよ」

ハイディはセバスチャンがむつつりしてゐるのは、今朝インキをこぼしたことを怒つてゐるのだとばかり思ひ込んで、きげんを直させようと一生懸命に云つた。

「なるほど。しかし、まづおたづねいたしますが、何だつてまた、そんな風なものの云ひ方をなさるのです」

セバスチャンは、まだむか〳〵しながらたづねた。

「ロッテンマイアさんがさう云へつて仰しやつたの」

セバスチャンは笑ひ出した。この子は横柄なのではなく、ただ吩咐けられた通りに云つてゐるのだといふことがわかつたので、今度は親しさうに云つた。

「それで、何の御用ですか、お孃さん」

ところが、今度はハイディの方で少し腹を立てる番だつた。

「わたしの名前は『お孃さん』ぢやないわ、ハイディよ」

「全くで。ところがやつぱり同じ方が、私にあなた樣を『お孃さん』とお呼びするやう、お吩付けになりましたので」

「まあ、さう？　そんなら、さうしなきやならないわね」

ハイディは昨日と今日とで、とにかくこゝの家ではロッテンマイアさんの云つたことは何でも從はねばならないといふことがわかつたので、素直に云つた。

「あゝ、これでわたし、三つも名前が出來たわ、――ハイディと、アデライデと、お孃さんと」

ハイディは溜息をついた。

「ところで、御用といふのは何ですか、お孃さん」

セバスチャンは食堂へお茶道具をしまひに行きながら云つた。

「窗はどうやつて開けるの」

「造作もない、かうやるんですよ」

セバスチャンは、大きな窗を一つ開け放つた。

「おや〳〵、背が屆きませんね。さあ、これで外がよく見えるでせう」

セバスチャンは、高い木の腰掛を踏臺に持つて來てくれた。

ハイディは、今こそ長い間見たかつたあのなつかしい景色が見られるのだと、わく〳〵しながらそれによぢのぼつた。だが、すぐに又がつかりしたやうな顏をして、頭を引つ込めた。

「まあ、つまんない、石の道ばつかりだわ。お家の向ふ側に行くと、何が見えて？」

「こゝとおんなじですよ」

「ぢや、どこへ行けば廣々とした谷が見わたせ

て？」

「高い塔にでも登るのですね。ほら、あそこに、てつぺんに金の球のついた教會の塔が見えるでせう？　あゝいふ所へ登ること、遠くまで見わたせますよ」

ハイディは腰掛を飛び降りて、階段を駈け下り、往來へ駈け出した。だが、ものごとは、ハイディの思つてゐるやうにはたやすくは行かなかつた。窓から見れば一寸一走りで行かれさうに見えた塔も、行けども〳〵ちつとも近くにならないばかりか、遂にはどこにあるのか皆目見失つてしまつた。ハイディは別の通りを曲つて、又どこまでも行つた。だが塔は見當らない。澤山の人があるいてゐたが、みんなあんまり忙がしうにしてゐるので、きつと訊ねても誰も教へてくれないだらうとハイディは思つた。するとひよつこり、ある町角に、手風琴を背負つて、をかしな生き物を抱いてゐる男の子を、ハイディは見附けた。ハイディは走つて行つて、たづねた。

「てつぺんに金の球のついた塔、どこだか知らないこと？」

「知らないよ」

「誰にきけば教へてくれて？」

「知らないよ」

「ぢや、ほかに、塔のある教會、あんた知らないこと？」

「うん、知つてら」

「ぢや連れてつてよ」

「そしたら、何をくれる？　先にお見せよ」

男の子は手を出した。ハイディはポケットを探して、美しいバラの花束のついたカードを取り出した。クララにほんのさつきもらつたばかりのもので、ハイディはとても惜しかつたのだけれど、でも廣々とした谷や、きれいな青い山がすつかり見渡せるのだと思ふと、氣前よく差し出した。

「ほら、これほしくない？」

男の子は手を引つ込めて、頭を振つた。

「ぢや、何がほいの？」

ハイディは無事にカードがポケットにかへつたのでほつとしながらたづねた。

「おあしだい」

「おあし？いゝわ、わたしは持つてないけど、クララにたのめば、きつと下さるわ。いくらほしいの？」

「五錢」
「ぢやつれてつてね」
二人は連れ立つて出かけた。道々ハイディは男の子に背中の手風琴のことなど、珍らしさうにたづねて、ぢきに二人は高い塔のある古びた教會の前に來た。
「こゝだよ」
ぴつたりと戸は閉まつてゐた。
「どうしたら這入れるかしら」
「知らないよ」
「セバスチャンを呼ぶ時みたいに、ベルを鳴らすのかしら」
「知らないよ」
ハイディは壁にベルを見付けて、思ひきりそれを引つ張つた。
「わたしが上に行つてる間、こゝに待つててね。歸り道がわからないから」
「そしたら、もう五錢くれるかい?」
やがて內側で鍵がごと〳〵鳴つて、重い戸がギィと押し開けられた。年をとつた番人が出て來て、子供達を見ると、びつくりして叱り付けた。
「何だとてこんないたづらをする?このベルにはちやんと『塔拜觀者用』と書いてあるのが、讀めんのか」
「だつて、わたしほんとうに塔に登りたいの」
「登つて何をする?誰かが行つて來いと云つたのかね」
「さうぢやないの。わたしが、塔へのぼつて、下が見たいの」
「早くお歸り。二度とこんないたづらをすると、承知しないよ」。
番人は戸を閉めにかゝかつた。けれどもハイディは番人の上衣を引つ張つて、一生懸命にたのんだ。
「ねえ、おぢさん、一ぺんだけでいゝから、のぼらせて頂戴よう」
番人はふりむいて、ハイディのその一生懸命な眼を見ると、いぢらしくなつて、「そんなにのぼりたいのかね」と、手を引いて連れて上つてくれた。
男の子は、おもての段々に腰を下ろして、おとなしく待つてゐた。
いくつもの階段を上つて、一番てつぺんに著くと、番人はハイディを抱き上げて、見せてくれた。
「ごーれ、よく見えるだらう」

ハイディの下に、見渡すかぎり果てしもなくつゞく屋根と塔と煙突に、又してもがつかりしてしまつた。

「わたしの見たかつたもの、なんにもありやしないわ」

「それ見なさい、子供には、ながめなんぞ、さつぱり面白うないだらう。もう二度とこんないたづらをするんでないよ」

狹い階段の曲り角の番人の部屋を出はづれた屋根ぎはに、大きな籠が一つあつて、その前で見張りをしてゐた灰色の親猫が、人間がやつて來るのを見ると、ものすごく啼き立てた。ハイディは立ち止つて、今までこんな大きな猫を見たことがないので、びつくしてながめてゐた。番人はハイディが猫にみとれてゐるのを見ると、

「わしがついてゐるから、何もしやしないよ。仔猫を見せてあげるから、來てごらん」

と云つた。ハイディは籠のそばに行くと、

「まあ、かあいゝこと！　かあいゝ仔猫ちやん！」

と叫びつゞけた。七八匹もゐる仔猫が、こけつ、もつれつ、ぢやれついて、滑稽な大さわぎを演じてゐるのを、その一つをも見逃すまいと、籠の前をあつちへ走り、こつちへ走りしながら。

「これ、ほしかつたら、みんなあげようか」

年寄りは、子供のしんから喜ぶ樣子がうれしくて、又同時に澤山な仔猫の厄介拂ひも出來やうといふので、かう云つた。

「まあ、わたしに？　みんな？」

ハイディは、あんまりうれしくつて、ほんとうだとは、なか〳〵信じられなかつた。こんなかあいゝ仔猫をクララが見たら、どんなにびつくりして、よろこぶことかしら、おうちは廣いんだもの、いくらだつて飼へる……

お玄關に犬の頭のベルのついてゐるゼーゼマン樣のお屋敷だといふと、番人は、あとで仔猫を屆けてあげると約束した。長年こゝで番人をしてゐるので、町中の家は大概知つてゐるし、おまけにゼーゼマン樣のお屋敷ならば、そこの下男のセバスチャンとは、友達なのであつた。

「でも、今二匹だけ、いたゞいて歸つちやいけないこと？　一つはわたしに、一つはクララのおみやげにしたいの。ねえ、いゝでしせう？」。

ハイディには、どうしてもこんな面白い見もの

を振り切つて歸ることは出來ないのだつた。番人は親猫を外へつれ出して御飯をあてがつておいて、ハイディにすきなのを二匹、こらせてくれた。ハイディは眼を輝かせながら、眞白いのと、黄と白の縞のとを取り出して右と左のポケットに、一匹づつ大切にしまつた。下へ降りて見ると、さつきの男の子がおとなしく待つてゐた。ハイディがいくらお玄關に金の犬の頭のついたベルのあることや階段の格好や窓の樣子を話して見ても、その子にはゼーゼマン樣の家がわからなかつたので、ハイディは一生懸命になつて、指で屋根のギザ〳〵の形を書いて見せたり、お隣の家の樣子まで話して聞かせたりしてゐるうちに、やつとその子も思ひ出して、先に立つてぢきに連れて行つてくれた。ハイディがベルを鳴らすと、セバスチャンがすぐに出て來て、ハイディを見ると、「早く、早く」とせき立てた。

ハイディが急いで跳び込むと、セバスチャンは、男の子など目にも止めずに、すぐにドアを閉めてしまつた。

「さあ、大急ぎで、お孃さん、すぐに食堂へおいでなさい。もう皆樣食卓におつきですよ。ロッテンマイアさんはカンカンに怒つてますぜ。何だつてまた、お孃さんはあんなにふら〳〵飛び出したんです」

ハイディは食堂に這入つて行つた。ロッテンマイアさんは見向きもしない、クララも口を利かなかつた。部屋中はなんとなく氣持わるく默り込んでゐた。セバスチャンがハイディの椅子を持つて來て、ハイディが腰かけると、ロッテンマイアさんは恐ろしい顔をして、厳しく申し渡した。

「いづれ後で云ひますが、これだけは云つておきます。アデライデ、あなたは、誰のゆるしも受けないで家を飛び出し、しかも今時分までうろ〳〵こほうつき歩くなど、一番お行儀のわるい、いけないことをしたのですよ。ほんとうに、情けない、私は今までこんなこと、聞いたことがありませんよ」

「ニャ――オ！」

これにはロッテンマイアさんのかんしやくが破裂してしまた。

「あなたといふ人は、アデライデ、わるいことをしておいて、茶化してしまはうといふのですかッ」

「わたし、なにも――」

ハイディが云ひかけると、
「ニャーオ、ニャーオ！」
セバスチャンは、お皿をおつこちさうになつて、急いで部屋をとび出してしまつた。
「よござんす、このお部屋から出ていらつしやいッ」
ロッテンマイアさんは、怒つて聲もかれ〳〵になつてゐた。
「わたし、ほんとうに、なにも——」
ハイディが恐る〳〵立ち上つて云ひかけると、又
「ニャーオ、ニャーオ、ニャーオ！」
「だけど、ハイディ」クララが見兼ねて口をはさんだ。「そんなことをすれば、ロッテンマイアさんが怒るつてわかつてゐるのに、どうしてさういつまでも猫の啼き眞似ばつかりつゞけるの？」。
「わたしぢやないのよ、仔猫がゐるのよ」
「まあ、なんですつて？　仔猫？」ロッテンマイアさんは金切聲で叫んだ。
「セバスチャン！　ティネッテ！　早く來て、このいやらしいものを、摘み出しておくれ早く！」。
そして、クララの勉強部屋へ逃げて、鍵をかけてしまつた。ロッテンマイアさんは、生き物の中で、仔猫ほど嫌ひなものはないのだつた。
セバスチャンはさつきハイディにお給仕してゐて、仔猫の頭がポケットからのぞいてゐるのを見た時から、およその事の成りゆきがわかつてゐたので、妙な聲でニャーオと啼き出された時は、もうをかしくてお給仕がしてゐられない、飛び出してしまつたのだつた。やつと笑ひが納まつて食堂に來て見ると、すべてのさわぎはもう終つてゐて、クララが膝に仔猫を抱き、ハイディがそばにうづくまつて、二人ともにこ〳〵笑ひながら、この小さなかあいゝおとなしい生き物と遊んでゐた。そしてロッテンマイアさんに見付からない所にベッドをこさえて、仔猫をかくしておいておくれと二人にたのまれて、セバスチャンは悅んで引き受けた。